## 二　教壇記録

### 第一次指導（一時間目）

本は開いたままにしておきなさい。閉じておかないで開いたままにしておきなさい。あなた。本を開きなさい。

礼

かぐやひめのところ、今日から終りまで六日間毎日毎日やります。

読んでみましたか？　読んでみた人、手を挙げなさい。おもしろかったか？　おもしろかった人。手を挙げなさい。

あ、よしよし。これから六時間勉強したら、とってもおもしろい、もっともっとおもしろくなるよ。

### 一　よむ

ここのところ十人に読んでもらいます。今日は、誰から？　一は、あなたか。二は、あなた。三は次の人あなた。……（四，五と十まで順に指して）あなたまで読んでもらいます　。

ここを（一の絵と文を示されて）一人に読んでもらいます。つぎこうあげたら、ここ（二のところ）を一人、ここをあけて、一人……というふうに、一人ずつ、読んで下さい。

大きい声でゆっくり読んで下さい。聞く人もしっかり聞いて下さい。

一、男(そのたけを)　二、女40　三、男42　四、女50　五、男63（村から町へ）六、女50（春　月　どうした）　七、男八、女　九、男　十、女

実に力強い堂々たる読みです。（　）内は師の批正をいただいた語。数字は秒。ご自分で音読して速さを測ってみて下さい。この子たちのゆっくりした読みが分かりますでしょう。

### 二　とく

本をおいて下さい。

驚いたね。ずいぶん長いところだが、十人の人みんなよい声でしっかりした読みでした。聞く人も、体を真直

ぐにして、よく聞いてくれたね。
それだったら、先生の言うこと何でもわかるな。
しっかりとここのところを考えてみましょう。

題目　板書

かぐやひめというお話だね。
かぐやひめというこのおひめさまは、もともとどこの国の人か。
○　月の国のおひめさまです
月の国のおひめさまです。それが、日本の国へきて、だれの娘になったの。
○　竹とりのおきなというおじいさんとおばあさん
おじいさんの名前は、たけとりのおきな、おばあさん、名前はわからないが、おばあさん。この二人の娘になりました。

絵

一番はじめの絵を開けて。
おじいさんですね。竹とりのおきなですね。竹とりのおきな　わかるでしょう。
この人…何を仕事にしている人？
○　竹をとって、かごをあむの
竹をとってかごをあみ、そのかごを売ることを商売にしているの。
やぶに行ったらこんなにたくさん竹がある。そのうちからこの竹をどうして切ることにしたの？
ほかの竹を切らないで、何でこの竹を切ったの。
○　光り輝いてふしぎだから
あんまりピカピカ光っていた。ふしぎだからこの竹を切ってみようと思った。
中から何が出てきたか？
○　かぐやひめ
おひめさまが出てきました。かぐやひめ。そのときは名前があったか。
○　なかった
とても小さな女の子が出てきた。どのぐらい小さいの。
○　これぐらい（手のひらを出して答える）
これにのるぐらい（手のひらで示され）小さいの。みなさんは　これにのるか。のらないだろう。ほんとに小さな女の子。

二の絵

いま、おじいさんは　にこにこしているけれど、かぐ

やひめが竹の中から出てきた時は、こんなにこにこ顔だったか。

○　嬉しい顔をした

初めっから嬉しい顔をしたのかな。

○　驚きました

驚きましたよ。光ってるだろう。それ切ったら、竹の中からピカピカ光るひめが出てきた時に、おじいさんは驚きました。手に上げているうちに、にこにこ顔になりました。何が嬉しいのか。

○　子どもがなかったの

おじいさんとおばあさんは二人（ふたり）だけ。子どもがなかったの。ところが、小さい女の子授って、急ににこにこになったの。

ここのところ（手のひらの上のかぐやひめを指されて）を見なさい。何か丸いものがボーとしているだろう。何？

○　光っている

光っています。ぴかぴかぴかぴか光っているの。えらいおひめさまだね。

その次の絵を開いて見なさい。（三）

今　竹とりのおきなが作っているものは何？

○　かぐやひめを入れるかご

かごを編んで、かぐやひめを入れて育てよう。

嬉しそうな顔をして編んでいるでしょう。

嬉しいのはおじいさんだけか？

おばあさんは嬉しくないのか。

○　嬉しい

おばあさんもとても嬉しいの。おじいさんも嬉しくて嬉しくてしようがない。

おじいさんとおばあさんの住んでいるうちは同じだけれども、だんだん違ってきたんだよ。くらしが　どんなになってきた？

○　にぎやかになりました

ひとり来たために、にぎやかになりました。それだけかな。あなたは。

○　お金持になりました

その次あけてください。（四の絵）

ここに、手のひらにのるような女の子がおりますか。

○　いません

手のひらにのるような女の子がどうなったの。

○　大きくなったの

こんなに(ゼスチュア)なるのにどのくらいかかったか。
○　み月かかった
三月でこんなに大きくなりました。皆さん二年生になったのは四月でしょう。四月、五月、六月、七月とよ月たっている。ところが三月でこんなになったの。ふしぎな女の子だね。
そればかりでなく、家の中はどうなったか。
○　明かるくなった
ピカピカ　ピカピカ光るの。真っ暗なところでもちゃんとわかる。かぐやひめ、どこへ行ったかなと、さがすことないの。あかりも電燈もいらない。
ここにいるのは(村人を指し)誰でしょう。
○　人です
どこの人です？
○　村の人
村の人です。村の人は、黙って見ていたのか。
○　お話していました
何かお話したでしょう。村の人達は、ひめのことを賞めているのでしょうか　悪口いってるのでしょうか。
○　賞めている
賞めてるのです。びっくりして賞めています。「とってもきれい。とてもやさしい。かしこいひめだ。」とみんなで話しあいながら見てるの。
さ、その次の絵。(五の絵)
ざぶとんに座っているのはどなたですか。
○　みかどの家来
帝の家来です。帝と言ったらどなた。
○　てんのうへいかです
今の天皇陛下です。その家来が何しにこられたの。
○　ひめを見にこられた
日本の国で一番えらい方の使が、ひめを見にこられたのです。ぴかぴかひめはどこにいる。
○　どこかにかくれている
ぴかぴかひめはいないの。どこかにかくれていて会わないのです。
次の絵(六)
ひめの顔はどんな顔か。うれしそうか。
○　悲しい顔
悲しい顔をしています。何を見るとこんな顔になるの。
○　月を見ると

月を見るとこんな顔になるの。皆さんは、お月さん見て、こんな顔になったことあるか。

○「――――」

ないでしょうが。ああ、きれいだな。いい気持だと思うでしょう。ところが

ひめはいつまでもこんなふうに顔あげて、月を見て、頭をあげておったろうか。

○　あげていない

あげていません。こう(頭を上げて)なっていたのが、段段こう(頭を下げて)なったの。

どんな時、こうなるのか。

○　悲しいとき

よし。考えるときにやるな。

その次(七の絵)

こんどは悲しそうどころじゃない。ひめ何している？

○　泣いている

どんなに泣いているの？　大きな声でわあわあと泣いているのか、しくしくと静かに泣いているのか。

○　静かに泣いている

静かにしくしくと泣いています。さ、

心配したのは誰？

○　おじいさんとおばあさんです

大事な大事な娘が泣いている。なんで泣くのか聞きましたね。

次の絵(八)

ここに人がたくさんいるよ。この人　誰？

○　みかどの家来

帝の家来です。手に持っているのは何？

○　弓矢

弓矢を持っています。何をするつもりで持っているのか。

○　かぐやひめを守るため

かぐやひめを守るためです。もしもかぐやひめを迎えにきたら、この弓矢や刀で追いはらってやるのです。

かぐやひめはいないが、どこにいるの。

○　くらの中へかくれた

次の絵(九)

ここにもたくさん人がいるが、これは誰？

○　天人たち

月の国の天人たちです。帝の家来のように、手には弓

矢をもっているか。腰には刀をさしているか。

○　いません

帝の家来は弓矢を持っているが、天人たちは何も持たない。

乗物は何？　汽車か　自動車？

○　雲に乗って来ました

雲に乗ってきました。きれいな着物をきたお姫さんたちが、すうっと雲に乗って降りてきました。

次の絵(十)

かぐやひめはどこにいますか。

○　車に乗っています

これからどこへいくのですか。あなたは。

○　月の国

月の国へ帰っていきます。おじいさん、おばあさん、追いかけることができたろうか。

○　できない

できません。かぐやひめは、車に乗ってすうっと天にのぼってしまったの。

えらい長い話が　皆よくわかっているね。

絵のそばに番号をつけて下さい。一番、二番……十番までつけなくちゃならんよ。

師　黒板に一から十まで番号をかかれて

つけたか。番号つけたら、この絵に題をつけてみましょう。

一番さきだけつけてみましょう。初めに　竹とりのおじいさん、どんな竹を切ったのだったか。

○　光っている竹

師　光っている竹　と板書されて

さあ、始めなさい。やっているうちに時間になります。そしたら、続きは家に帰ってからやって下さい。

○「――――」

もう一つやってみるか。二番は。

○　小さな女の子(板書され)

うまい。そしたら十番までつけられるな。奮発してやってみなさい。

三　よむ

四　かく

児・自習・師・机間巡視、3分。

いいの見つけた人あるね。

三番は、きれいなかご(板書されて)だね。

ベル鳴る　十時

それじゃ家へ帰って十番まで、ちゃんと考えてきて下さい。

下に書くところがあっても、下に書かないで全部やっていらっしゃい。

礼

時間

一、よむ　八分

二、とく　○題目　◎絵　○手引　二十七分

三、よむ　四、かく　五分

このお取扱いは、二時間かけての第一次指導です。従って、手引を出されて終りになるわけです。何とか書きなぐった単語をたよりに再現したつもりですが、緩急自在な二とくの味は出ていません。

**板書事項**

かぐやひめ

1　光っている竹

2　小さな女の子

3　きれいなかご

4

5

6

7

8

9

10

## 第一次指導（二時間目）

この講堂のすぐそばの製材所の音がさわがしい。

九時二十分始まる

## 四　かく

それじゃ、本を開いておいて下さい。帳面も開いておきなさい。鉛筆は机の中にしまっておいて下さい。鉛筆は今日は使いません。下じきも使わないからしまっておいて下さい。

さあ、それでは始めましょうね。あなたも本を開きなさい。

そのままで　ご挨拶しましょう。

礼

よい姿勢だね。

昨日、帰ってから、絵に題をつけてみたか。帳面に書いてみたか。

全員挙手

それじゃ、帳面を開いてみせて下さい。

机間巡視　時々小声で言っておられる

九時二十五分

これは驚いたね。全部の人が十番まできちんとやってきてくれたね。とてもよい二年生でしたね。

先生も、これにしようか、あれにしようかな迷って、一ぺん書いて別に書き直したりして考えました。そういう人、いたでしょう。書き直した人がいました。そういう勉強をすると、とてもできるようになります。

先生のをここに(黒板に)書くから黙って見ていて下さい。みんなが選んだのと合わなくてもよいですよ。みんな、とてもよいのを選びましたよ。合わなくてよいですよ。

一線引いて　十区画　番号をつけられて

一番さきは、昨日一緒にやったから、これはみんなそろったね。二番目も一緒にやったから、これもみんなそろうね。

三番目も一緒にそろうね。(と、話されながら　**1光っている竹　2小さな女の子　3きれいなかご**　と板書される)

四番目は「ふつうの人」と書いてくれた人あったね。ふつうの人でもよい。ふつうの人になって、そして初めて名前をもらったから「かぐやひめ」と書いておきますよ。(**4かぐやひめ**と板書)

そこへお使が来たのね。(**5つかい**と板書)

ある年の春になると(**6かなしそうな顔**と板書)

こうなったのね。

いよいよ秋の十五夜近くなると、とうとう……（**7なくと**板書）こうなったのね。

さあ、迎えに来るというので（**8みかどのけらいと**板書）皆、弓矢や刀を持って守ってくれたでしょう。

その次（**9天人たちと**板書）雲にのってやってきたのね。

そうして（**10天へと**板書）月の国と書いた人もあったね。天へ帰って行ってしまったのね。

書き終って

さ、もう一度家へ帰って書いてみなさい。先生の書いたのを思いだして書いてみると、よくわかりますよ。

帳面閉じて机の中にしまいましょう。

## 五　よ　む　（二分）

声を出さないで読みましょう。

指黙読　一回

さあ、大きい声で読んで下さい。

指音読　一回

えらいよい読みだったね。体が真直ぐだとこんないい読みができるのね。

## 六　と　く

かぐやひめを育てたおじいさんとおばあさんがこの女の子に名前をつけたのね。（4かぐやひめを指し）どうしてこのような名前をつけたの。

○　わすれました。（勢よく手を挙げたが立ち上がって忘れる。低学年によくあること）

それじゃ　あなたは。

○「……」

声小さく聞きとれない。製材の音やかましい。

きれいです。（師近づいて答をうけとられて）

きれいだから、かぐやひめとつけたの。とってもきれいな女の子。

ただきれいなだけじゃなかったでしょう。その上に、どんな子だった？

○　光っている

光っているの。ピカピカ　ピカピカ　ピカピカ　光っているの。

黒板に黄チョークで

## かぐやひめ の回りに光を

それで　かぐやひめという名前。

部屋の中はすみからすみまで、ピカピカ光って明るいの。とても大したおひめさま。きれいで光って、その上にとってもいい人なのだよ。

どんなひめなの。

○　やさしかった

とてもやさしいの。もう一ついいことがあるよ。

○　うつくしい

うん、きれいなのね。これはどうだったか。頭はどうなのか。

○　りこう

とってもりこうなの。きれいで、ピカピカ光って、りこうで……。それだったらいいとこばっかりでしょう。きれいで、光って、その上とっても、りこうで、やさしい。すばらしい女の子です。

そういう女の子だけども、顔が変ってきたところがあるでしょう。何番目から顔が変ったか。

○　六番目から

六番目から変りました。一番目から五番目まではとっても不思議な力のあるおひめさまだったよ。

どこが不思議なの。

○　光っている

光っている。これは不思議だな。みんなはいい子だがさっぱり光らないだろ。先生も光らない。これは不思議だ。

もうないかな。もっとあるさ。

○　竹の中から出てきたの

竹の中から出てきました。竹は丸いだろう。そして節があるだろう。皮もあるだろう。どうやって竹の中に入っていたのだろう。その上、姫が入っておったら外からも光が見えたの、竹の中に入っているのにピカピカ不思議に光っている。

もっとあるさ。ふしぎは。

○　一人前になった

うまいこと言った。一人前に大きくなるのにいくらかかったか。

○　み月かかって

三月で　こんなのから、こんなに大きくなりました。

みなさんが二年生になったのは四月でしょう。それから、四月、五月、六月、七月ともう四月にもなるんだよ。その間に、これが(手のひら)こういう娘になったの。

さ、もっとあるさ。不思議なことが。

○「――――」

おじいさんが、小さな女の子をつれてきて育てたら、おじいさんが切る竹の中から、時々出てきたでしょう。何が出てきた。

○　たからもの

宝物が出てきました。不思議だね。みんなが切ると出てくるか。出ないだろう。ところが、おじいさんが切ると、宝物がどんどん　どんどん出てくるの。

そういう不思議な、きれいなひめが、おじいさんとおばあさんの家の中にいるんでしょう。そんなひめがいることを誰も知らなかったの。

○　知っている

みんな知っていたのさ。村の人もみんな知っていた。きれいなひめ、やさしいひめ、光って美しいひめだなあと皆話した。

そういう話が、だんだん　だんだん誰のところへと伝わったの。

○　みかど

日本で一番えらい帝のところまでとどいた。帝は使いの者をよこしました。姫は使いの者に会いましたか。

○　会いません

帝というのは一番偉い方。あたり前の人が会わなかったら、とんでもないことになるの。

でも、姫は会いませんでした。そんなに言われる程の娘ではありませんと、会いませんでした。

ところが、そんなかぐや姫にもかなわないものがあったの。何？

○　月の人

月の国の人にはかないません。はじめはえらい力を持ったかぐや姫です。ところが天人達には、かなわない。とうとう天につれられて行ってしまうの。竹の中から出て、おじいさんおばあさんに育てられて、立派な娘となったが、天人に迎えられて、とうとう天へ帰って行った。そういう話。

かぐや姫はそれが分って悲しそうな顔をするようになりました。かぐや姫が変ったところはここ(6を指し)か

らだが、ここで(6を指し)おじいさんやおばあさんに悲しいわけを話したか。

○　話しません

悲しい顔をするだけで話しませんでした。

わけを話したのはどこかな。

○　七番

あしたは、かぐや姫がわけを話すところ、七番をやります。しっかり勉強して下さい。

## 七　よむ

また十人の人に読んでもらいます。昨日のように　大きい声で　ゆっくり読みましょうね。

よむ　十人(八分)

あんまりうまいから、もう一度読んで下さい。あしたからは、みんな読めません。長いからね。

よむ　十人

本をおいて下さい。これでみんな読んだね。どの人もどの人も、みんなしっかり読めた。えらいね。聞く人もとてもよい姿勢でよかったね。

今日帰ったら、勉強したことを考えながら書いてくるのだったね。そしたら、あしたもよくわかるよ。

道具、おじぎしたら忘れないで持って帰りなさいね。

机間巡視　三分
四、かく　六分
五、よむ　二分
六、とく　十五分
七、よむ　十六分

板書事項

8　みかどのけらい
9　天人たち
10　天へ

注　原井の子どもたちの読みを聞いていると、頭が下がる思いがする。

句読点で、きりっと口を結んで、ゆっくり、大きい声で、はっきりと読んでいる。

しかも、どの子もどの子も、そのように読む。弱い読みの子がいない。又、全学年に徹底しているのは驚異である。

師は、「私は先師の道をたどって歩み続けているだけである。私が考えたものは、手引と、第三次指導と、入門期の句読点の指導ぐらいのものである。私が若しノーベル賞をもらうとすれば、句読点の指導だろう。」と話しておられたことを思い出した。

これ程、効果のあるものとは知らなかったので、驚いた。

五十回大会で初めて、ノーベル賞の値打を確認したのである。

この長文を読んで、一回目より二回目と、さらに教室が引きしまり、微塵のゆるみもない。深く耕してやると、読む毎に深まるのである。

## 第二次指導（三時間目）

子どもたち、早めに着席。教科書を開いて読み始める。

それじゃ本を置きなさい。

礼

さあ、昨日家に帰ってから、帳面に、先生がここに（黒板）書いたのを書いてみたか。

全員挙手

おお、みんな書いてきてくれたか。よかったね。それだったら、とってもよくわかったでしょう。

さあ、今日も読みます。初めからみんな読むと、時間が足りなくなるから、四のところから読みます。四のところ開いて下さい。

四、その次五、その次開いて六、もう一つ七。

四から七まで読んでもらいます。

あなたから、あなたが四、あなたが五、あなたが六、あなたが七で　よったりで読んで下さい。

昨日のように、大きな声で読んで下さい。聞く人もし